

第1節 未来型のこどもの身体表現と促進法

坪井寿子・磯友輝子・藤後悦子

要約

未来型の子どもの身体表現と促進法に関して、2つの研究を行った。1つめは模倣に関するものであり、もう1つは音刺激や言語刺激に対しての自由表現に関するものである。いずれも年少児、年中児、年長児について検討を行った。模倣に関しては、年少児においてはおおまかなポーズの模倣は可能であるが、細かい点およびバランスを要する動作の模倣は、年長児の方がうまくできていた。一方、自由表現に関しては、いずれの年齢段階の子どもたちものびのびと行っていたが、身体表現のバリエーションとなると、年長児の方がより豊富なレパートリーが見られた。今後は、うまく表現できることと自分の思った通りに表現できることがいかに相互作用的に発達をしていくのか、さらにはそのためにはどのような働きかけが保育者に求められるのかを検討していくことが課題となる。

キーワード

こども、身体表現、模倣、自由表現、音刺激、言語刺激

1. 問題

本論では、幼児期の子どもたちの身体表現について、発達心理学的観点を中心にさまざまな側面から検討していく。現代社会における幼児期の子どもが置かれている状況を検討し、子どもたちが実際に生活している地域の特性を活かした身体表現及び状況変化の著しい社会でも適応可能な未来型の子どもの身体表現のあり方について考察していくため、2つの研究を行った。

研究1の身体表現の模倣に関しては、技能学習、運動学習から検討していく。ここでは、応用的な側面として、模倣力をつけることの意義についても含めて考えていく。研究2の子どもの音や言葉に対する子ども達の自由な身体表現に関しては認知の働きとも併せて検討していきたい。環境からの情報の取り入れ（認知）と環境への働きかけ（（身体）表現）との相互作用についてみていく。

環境からの情報を取り入れるもしくは入力する働きである認知と、環境へ働きかけるもしくは出力する働きである身体表現との関連については、オノマトペ（「うようよ」「くるくる」などの擬態語や「ざあざあ」「わんわん」などの擬声語）を用いて検討したものがいくつかある。たとえば、古市(1995)によるオノマトペ刺激が幼児の身体表現に与える影響に関する研究があるが、ここでは、「洗濯機の回る様子」「ケーキの材料を混ぜて焼く」を普通の言葉がけで子どもたちに身体表現を行ってもらったのと、このオノマトペを用いた言葉がけで身体表現を行ってもらった場合を比較した。その結果、オノマトペを用いた後者の方が、早く身体表現が出現し、動きに確からしさがみられ、類似したまとまった身体表現もみられたことが示された。また、西・本山(1998)では、花などの身近なものに対し、名前(花のように)、動き(花が咲いているように)、オノマトペ(花がぱっと咲いているように)と、様々な言語表現からの身体表現の比較を行っている。

さらに、子どものイメージと身体表現との関連については、「川をジャンプ」することをイメ

ージして子どもたちに身体表現を行ってもらうことを検討したもの(高野 2000)や、ゆっくりとした動作やはやい動作を子どもたちがどのようにイメージして動作(身体表現)しているのかを示しているもの(森下 2003)もある。

このような観点から、研究1として「子どもの身体表現の模倣能力」、研究2として「音や言葉による子どもの自由な身体表現」に関する研究を行った。

2. 研究1 子どもの身体表現の模倣能力について

(1) 目的

幼児期の子どもたちにおける模倣能力と身体表現について探索的に検討する。

(2) 方法

実験参加者は、関東地方の幼稚園の園児、年少児、年中児、年長児クラス(各 20 - 30 名)である。幼児期の子どもたちに、どの程度正確にモデルのポーズを身体表現できるのかについて探索的に検討するために、以下の課題を実施した。課題は、大人が示したポーズを模倣することである。実際に使用した模倣のポーズは、「カエルのポーズ」「トリのポーズ」である。「カエルのポーズ」は、頭を上に乗せて膝を曲げるポーズである。一方、「トリのポーズ」は、手を前に少し前かがみになって後ろ足を上に上げてバランスをとるポーズである。



図1-1 カエルのポーズ(左図)、トリのポーズ(右図)



図1-2 「カエルのポーズ」を模倣した子どもたちの様子



図1-3 「トリのポーズ」を模倣した子どもたちの様子

(3) 結果・考察

年少児と年長児とで身体の模倣表現の発達にいくつかの点で違いがみられた。以下、ポーズごとに年齢ごとの特徴をまとめる。

①カエルのポーズ

年少児は、少し時間が経ってからポーズをとる子どもが比較的多くみられ、膝を曲げてない子どもが多く見られた。また、手を頭にのせているだけの子どもも少しいた。課題中ずっと立ったままの子どもも数名いた。

年中児については、最初は一部の子ども達が膝を曲げている状態であった。また、年中児クラスのみ、担任の先生のアドバイスがあった。これにより、ほとんどの子どもが膝を曲げたが、座ってやっている子どもも一部いた。

年長児に関しては、一斉に、スムーズに曲げて、かがんで頭に乘せているポーズをとっていた子どもたちが多くいた。また、膝をしっかり曲げていた。

②トリのポーズ

年少児では、片足立ちがフラフラしているが、足自体もあまり上げていない。一部の子どもは足のあげ方が低かった。

年中児では、年少児よりもかなりモデルと似ているようになった。年長児よりも足が少しフラフラしていた。また、その場で少しケンケンになっている子どももいた。

年長児に関しては、手を合わせて、より前屈みになっていた。足を高く挙げているので、バランスをとるのが少し難しいらしく、少しフラフラしている子どももいた。この多少足がフラフラしている様子は、モデルと同じくらい足を上げようとしていることによるものであり、このことから年少児や年中児の子どもたちと比べ、モデルのポーズとかなり似ていることが示された。

③ポイントの教示の効果

年中児のみ、ポイントとなる点を提示した上で、再度同じポーズを行ってもらった。

その結果、「カエルのポーズ」では、しっかり曲げている分、少しグラグラしている様子も見られた。かかとを上げている子どもは足も広げている傾向があり、逆にかかとをつけているとそれほど足を広げていない傾向がみられた。

一方、「トリのポーズ」では、頑張って足を上げている分、グラグラしている、足首を曲げよ

うとしている子どももいた、などの特徴がみられた。

表1 模倣による身体表現の概要

	年少児	年中児	年長児
「カエル」のポーズ	全体としてポーズはとれているが、きちんと曲げてはいない	膝をきちんと曲げている子どももいた	膝をしっかり曲げていた子どもが多かった。
「トリ」のポーズ	全体としてのポーズはとれているが、足があまりあがっていない。	足を上げているので、ケンケンしている子どもも多かった	足がフラフラしている子どももいたが、全体としてバランスがとれていた

④考察・まとめ

身体表現の模倣に関しては、古市(1999)による幼児におけるダンス模倣の発達の研究がある。そこでは、2歳児から5歳児の子どもたちに、模倣の能力が上達していることが、動きの内容、動きの順序や動きのタイミングなどのいくつかの観点から示されている。たとえば、曲に合わせて、「両手を口ばしのように口のところで・・・」のような動作を表現することが求められている。

さらに、古市(1998)では、身体表現に必要な基本的な動作の学習について具体的に紹介している。実際に「あるく」「はしる」「とぶ」「まわる」「つなぐ」「たたく」「ゆれる」「のびる」「おす・ひく」についてひとつひとつ紹介されている。

本課題において子どもたちは非常に楽しく模倣課題に取り組んでいたが、その一方で、上手にポーズの模倣ができるということは、実生活で役に立つ一面もある。たとえば、火事になったとき、ハンカチやタオルで口を押さえながら身をかがめながら逃げる、雷がなったときは腹這いにかがむなど、こういった動作をすることが大切になる。

実際に、子どもたちが、ここで行った課題の延長上に遊び感覚で繰り返し行っていくと、体全体で覚えていくことができると考えられ、実際にこういった教材も開発されている(図2: 防災ダック、日本損保協会)。



図2 防災教材の例(防災ダック)(損保協会)

3. 研究2 音や言葉による子どもの自由な身体表現について

(1) 目的

幼児期の子どもたちが、生き物や自然現象の音や言葉に対して、どのような身体表現を行うのかを探索的に検討する。

(2) 方法

実験参加者は、関東地方の幼稚園の園児、年少児、年中児、年長児クラス(各 20 - 30 名)である。課題は、さまざまな音(風の音や動物の鳴き声など)や言葉を聞いて、自由に身体表現を行ってもらうものである。実験の流れは以下の通りである。まず、ライオン、カラス、セミ、水、風の音や鳴き声については、最初に音を聞かせた後、自由に身体を動かしてもらった。その後子どもたちに何の音かの言語化を求めた。実験者が何の音であることを示してから、2回目の身体表現として再度同じ音を聞いて自由に体を動かしてもらった。続いて、キリンと太陽については、言葉のみを示して自由に身体表現を行ってもらった。音源は、「自然コロンビア効果音全集」の(1)自然および(2)動物の一部から使用した。また、子ども達の様子をビデオ映像で撮影した。

(3) 結果・考察

全体的な傾向として、子どもたちは、音や言葉という実態のないものから、イメージ豊かに表現活動をしていることが示された。以下、各反応を詳しく述べていく。

①音からの表現

音からの表現についてみていく。

1) ライオン

年少児では、1回目では、ほとんど立っているのみであり、一部、上半身を横にくねくねとねじれの動きをしていた。また言語化では、「かいじゅう」「ライオン」などと言っていた。2回目の音の提示後では、体を回している子どもが少し増えたが、多くはそのままであった。

年中児では、1回目では、ほとんど立っている。言語化では、「ライオン」「車」「バイク」などと言っていた。2回目では、ほとんど動かないで、考えている様子であった子どももまだ比較的多くいた。

年長児では、少し考えた後、その場で腕を動かす子どもが一部いた。近くの子ども達を見つめ合ったりしていた。両腕を振ったりして怪獣のようにしていたといった特徴もみられた。言語化は、「ライオン」「チータ」「かいじゅう」「トラ」がみられた。2回目では、男の子を中心に手をバタバタしていた。2~3人でまとまっているところもみられた。女の子も四つ足になっていた。



図3 ライオンの鳴き声からの自由な身体表現

2) カラス

年少児では、1回目では、手をバタバタしていた。言語化については、ほとんど全員「カラス」と言っていた。2回目については、半数くらいの子どもが跳びながら手をバタバタしていた。じっとしている子どもがいた一方で、バタバタ振っている子どもやその場でジャンプしている子どもがいたが、その割合は前者の方が少し多くみられた。

年中児では、1回目に関しては、「カラス」と言いながら、多くの子どもが手を動かしていた。だんだん跳びながらの動作をしている子どもが増えていく。初めは少しの子どもが動いていたが、徐々に増えてきた様子がみられた。言語化では、みんな「カラス」「ライオン」などと言っていた。2回目では、少し考え込みながら、ピョンピョン、手をバタバタさせながらしている様子であった。また、1回目より多くの子どもが動いた様子もみられた。

年長児では、1回目では、一斉に手をバタバタしていた。多くはその場でジャンプをしていた。2~3人でまとまっている子ども達もいたし、自分の思い思いに動いている子どももいたなどの様子がみられた。言語化に関しては、みんな「カラス」といっていた。2回目に関しては、一斉に手を動かしながら、少し動き回っていた。前に歩きながらジャンプしている子どもが増えたといった様子が見られた。

3) セミ

年少児においては、1回目では、カラスの時のような感じで、その場で、手を後ろにしてピョンピョンと跳んでいた。多くの子どもはカラスの時と似たような感じの動作であったが、カラスの時より多く跳んでいた。終わりの方で転んでいる子どももいた。言語化においては、一斉に「セミ」と言っていた。2回目においては、半分くらいの子どもが、後半は疲れて座ってしまうほど、元気良く走り回っている様子であった。また、1回目のときより走り回る子どもが増えた。手を後ろにしている子どもと横にバタバタしている子どももいた。



図4 セミやカラスの鳴き声からの自由な身体表現

年中児においては、ピョンピョン跳んでいる。ほとんどの子どもたちがのってきて動き始めた様子であった。言語化については、一斉に「セミ」と言っていた。2回目については、より跳んでいた傾向にあり、よりアクティブになっていた様子がみられた。

年長児においては、1回目では、初めからセミと言いながら、壁（柱の一部が出っ張っているような箇所）にしがみついていた。数人の子どもがカラスに似た動作をしていた。しばらく経っ

て、数人が後ろの壁に行って、その後多く続いた、といった様子がみられた。言語化については、一斉に「セミ」と言っていた。2回目については、より、多くの子どもがしがみついていた、最初は数人から動いた、といった様子がみられた。

4) 水の流れ

年少児においては、1回目では、走り回る、座っていた子どもたちがその後立ち上がってその場でジャンプしていた子どももいた。その後さらに走り回る子どももいた。言語化においては、「川」「水」「滝」であった。2回目では、手を動かして走り回る様子や1人の子どもが手を動かしてから次々にまねをしていたといった様子であった。

年中児においては、立って回る。寝て回る子どももいた。言語化については、「雨」「海（きれいな海）」などであった。2回目については、走る子どもや床に寝て泳ぐまねの子ども、ハイハイ、ほふく前進（腹這いで進む）などの特徴がみられた。その一方で、立ったままの子どもたちもいた。

年長児においては、1回目では、1/3 くらいの子どもの寝そべって泳ぎ回っていた。四本足で歩くまねをしている子どもも見られた。友だちと声を出し合いながら女の子の中には寝そべっている子どももいた。言語化においては、「川」、「雨」、「水」、「池」などであった。2回目についてはほぼ1回目と同じであったが、少しアクティブに動いているようであった。女の子も含め多くの子どもたちが、ほふく前進をしていた。手を振りながら走っている様子も見られた。

5) 風の流れ

年少児においては、1回目は、少し考えてから走り回る、少し小休止の後はじめた様子であった。言語化については、「電車の音」、「ふくろう」などがみられた。2回目については、とても元気そうに走り回っていた。寝っ転がって休んでいる子どももいた。

年中児においては、1回目では、走り回っている子どもが多く、一部の子どもは、泳ぐマネのような動作をしていた。横むきのほふく前進もみられた、言語化については、「飛行機」、「電車」、「風」などがみられた、2回目については、早いテンポで走り回っている、ほとんどが立ち上がっている姿などがみられた。

年長児においては、ほとんどの子ども達が一斉に流れるように立って、1人の子どもは手を挙げて走っている様子が見られた。言語化については、多くの子どもたちが「風」などと言っていた。2回目については、キャーキャー言いながら走り回っており、いろいろな方向に走り回っていた。3人でまとまっている女の子もいた。最初は腕を振っていたが、手を上に伸ばす子どももいた。



図5 水や風の流れからの自由な身体表現

②言葉からの表現

次に言葉からの表現についてみていく。この場合は、提示が言語なので、言語化の活動はなく、したがって1回目と2回目の区別もないことになる。

1) キリン

年少児においては、手を上にやって長い首のようにしながら、ピョンピョンしながら歩く様子が見られた。一部の子どもは高さを表現しているようで手を上に伸ばしていたり、その一方で、他の様子がみられた子どもたちは手を下にしていた等のさまざまな様子がみられた。

年中児においては、手を上にして子どもたちもみられた。4つ足のまねをしている子どももいた。また、その一方で手を後ろにしている子どもがいた。全体的にみると、立っている子どもが約半分、4本足の子どもが約半分といった傾向であった。

年長児においては、4つ足で歩く子どもがほとんどであった。四本足で手は上向きにしているという動作が多くみられた。頭を付き合わせたり、耳をたてている様子を手であらわしている子どももいた。片手を上に伸ばす子どももいた。この姿は、キリンの4つ足動物であるという特徴と背の高い動物であるという特徴の2つを同時に両立させて表現しようとする様子が伺えた。



図6 「キリン」の言葉からの自由な身体表現

2) 太陽

年少児では、2~3人の子どもたちはジャンプの動作をしていた。他の子どもたちは考え込んでいたりして、あまり動かない子どもも見られた。

年中児では、手を上にして、丸を作っている子どもたちやごろごろしている子どもたちなど様々な動作がみられた。

年長児では、年中児の子どもたちにみられた上記の表現レパートリーに併せて、手を上にしてキラキラしている子どもたちやくるくる回りながら歩く子どもたちの姿もみられた。



図7 「太陽」の言葉からの自由な身体表現

表2 音や言葉からの自由な身体表現の概要

		年少児	年中児	年長児
ライオン	音1	ほとんど立っているのみ	ほとんど立っている	少し考えた後、その場で腕を動かす
	言葉	「かいじゅう」「ライオン」	「ライオン」「車」「バイク」	「ライオン」「かいじゅう」「トラ」
	音2	多数はそのまま、体を回している子もいる	ほとんど動かない、考えている様子	男児が主に手をバタバタしている
カラス	音1	手をバタバタしている子が少しずつ増える	手を動かしてだんだん跳ぶ子が増える	一斉に手をバタバタしている
	言葉	「カラス」	「カラス」「ライオン」	「カラス」
	音2	半分ほど、跳びながら手をバタバタさせる	少し考え込みながらピョンピョンしている	一斉に手を動かして、少し動き回る
セミ	音1	手を後ろにしてピョンピョン	ピョンピョン跳んでいる	壁(柱の凸部)にしがみついていた
	言葉	「セミ」	「セミ」	「セミ」
	音2	疲れるくらい、元気良く走り回る	より跳んでいる	多くの子どもがしがみついていた
水	音1	走り回る	立って回る、寝て回る子どももいる	寝そべて泳いでいる
	言葉	「川」「水」	「雨」「海(きれいな海)」	「川」「雨」「水」「池」
	音2	手を動かして走り回る	走ったり、床に寝て泳ぐまねの子どももいる	よりアクティブになる
風	音1	少し考えてから走り回る	走り回わり、一部は泳ぐまねの動作	ほとんどが一斉に流れるように
	言葉	「電車の音」「ふくろう」	「飛行機」「電車」「風」	「風」
	音2	とても元気そうに走り回っている	早いテンポで走り回っている	声を出して、色々な方向に走り回る
キリン	言葉	手を上にやって長い首のようにしながら、ピョンピョンしながら歩く	手を上にしている、4つ足のまね、手を後ろにしている	4つ足で歩く子どもがほとんど
太陽	言葉	2~3人はジャンプ、他は考え込んでいる	手を上にして、丸を作っている子どもたち。ごろごろしている子どもたちもいる	手を上にしてキラキラしている、くるくる回りながら歩く子どもたちもいる

③考察・まとめ

以上の結果をまとめると、どの年齢の子ども達も達も元気に身体表現を行ったが、年齢が上がるにつれて、動きにバリエーションが出てきたといえる。また、課題が進むにつれて、だんだん活発になってきた傾向がみられた。このような短期間な課題でも課題に対する慣れの効果が顕著であ

ることが示された。また、音の内容によっていくつかの特徴が見られた。たとえば、セミに関しては、年少・年中児では手を後ろにピョンピョンとジャンプしている様子であったが、年長児の子どもに関しては、壁(柱の凸部)にしがみついて、木に止まっている様子を表現している子どもも見られた。また、水の音に関しては、年長児においては、走り回る子どもだけでなく、泳ぐまねをする子どももいた。このような全体的な傾向が見られた一方で、個人差も見られた。それぞれの音が呈示されてからすぐに動き出す子どももいれば、他の子ども達が動いているのを見て、動き回る子どももいた。また、言葉のみを呈示した場合の身体表現では、年長児は様々な動きが見られたものの、年少児では戸惑いもあったようであった。

今回の結果から、子どもたちは、音や言葉という実態のないものだけで、イメージ豊かに表現活動をしていることが示された。身体表現の課題については、数量化をはじめ客観的にとらえることの難しさが指摘されている(古市 2007 および古市 1997)が、子ども達の持っているエネルギーを発揮できるようにするにはどのような働きかけが必要なのかを考えていくことが大切な問題と言える。

その1つとして、冒頭の「問題」の項で紹介した古市(1999)によるオノマトペから本研究での身体表現の課題を関連づけていきたい。本課題で用いた音刺激は、ライオンの鳴き声なら「ガオー」、カラスの「カーカー」、セミの「ミンミン」、水の流れの「ザーザー」、風の流れの「ヒューヒュー」のようなオノマトペとして表現することが可能である。特に年少児においては、言葉刺激の自由表現は音刺激のそれに比べて少し難しいようであった。その意味でもこの身体表現におけるオノマトペの影響を積極的に考えていくことも可能であるかもしれない。

4. 総合的考察

以上のような結果から、全体としていくつか考える必要がある点がみられる。1つ目は、刺激の種類についてである。生き物の鳴き声や自然現象の音には非常に多くの種類がある中で、本研究では前述の7種類の音刺激・言葉刺激を用いた。幼児期の子どもたちの生物概念の発達の諸研究(たとえば、稲垣・波多野(2005))も含め、どのような音刺激・言葉刺激を用いたらよいかを検討していく必要があると思われる。

2つ目は、個人差の問題である。本研究では主に、年少児、年中児、年長児と年齢による検討を行ったが、運動経験や生き物に接した経験の違いが、このような身体表現に影響されることは十分考えられる。発達による違いだけでなく、経験や学習による違いをも考慮に入れ、1人1人の身体表現の様相をとらえることも大切と考えられる。

3つ目は、意欲の問題である。本研究での課題では、子どもたちは楽しんで取り組んでもらったが、楽しみながら、さまざまな表現のパターンができるようになり、運動機能の発達の促進につながっていき、自分自身の内部にあるエネルギーあふれた思いを表現できるようになればと思っている。

4つ目は、社会・文化的影響である。坂元(1985)においても課題の内容は異なるが、幼児に同様の身体表現を試みた資料があるので、時代の違いにおける幼児期の身体表現についても、今後さらに検討を重ねていきたいと考えている。

5つ目は、方法論に関するものである。古市(1997)によるビデオ観察研究におけるデータ抽出

時の問題点に関する指摘がある。そこでは、ビデオ観察法は繰り返しデータを確認できる利点があるものの、時間的労力がかかること、評定者間の不意一致などの主観性の問題など課題も少なくないと言える。

最後に、本研究プロジェクトの全体的なテーマである『幼児・児童における未来型能力システムならびに指導者教育システムの開発』から、下記の①から③について少し検討していく。

①幼児・児童の能力育成システムについて：上記の結果を基に、子どもたちが実際に生活している地域の特性を活かした身体表現と環境が変化しても対応可能な身体表現との両面を活かした能力育成システムを考えていくことが大切と思われる。

②現職保育者・教員の指導能力育成教育システムの構築について：研究1においては、幼児期の子どもたちにおける模倣能力と身体表現に関する検討を行ったが、ごく限られた一例ではあるが、次の点が示唆される。まずポーズをまねてもらうときには、各部位のポイントを示すと効果がある。また複数の動作をおこなうときには、やりやすい順序をも示していく。さらにバランスの要する動作については、年齢を加味したアドバイスが必要、などである。研究2においては、幼児期の子どもたちにおける音や言葉に対する自由な身体表現に関する検討を行ったが、そこでも、ごく限られた一例ではあるが、次の点が示唆される。表現したいという意欲をくみつつ、その一方で、表現のバリエーションが広がるように働きかける。さらに、この場合、子どもたちの様子に応じて、自由に表現面を重視する場合と、いろいろな動作のバリエーションを子どもたちに学習してもらう面を重視する場合との両方を考えていくことが必要と考える。

③保育者・教員の志望者（学生）を対象とした指導能力育成教育システムの構築について：基本的には②と同じ点を考慮していく必要があると考えるが、志望者（学生）は、子どもとかかわっている経験が少ないので、指導能力育成教育システムを構築する際にも考慮する必要がある。これに関するものとして、幼児期の子どもたちの身体表現に関する指導能力育成教育を検討したものがあ。たとえば、西・野口(2005)による保育者としての身体的感性を育てる教育を検討したものがあ。これは、具体的に、授業での身体表現の体験による“共振”の形成とその段階の変化を検討したものである。ここでの共振とは、自己と他者とが共に表現していることを表している。また、保育者を対象に、幼児期の子どもたちがどのような身体表現をしたときに「豊かな」表現だと思われたかについて、そのエピソードの内容と子どもの年齢を調査した（古市 1996）研究があが、これらの研究は、明確な基準がとらえにくい子どもの身体表現に関する指導者能力育成教育システムを考える上で参考になると考えられる。

5. 文献

- 古市久子 1995 オノマトペ刺激が幼児の身体表現に与える影響について 京都体育学研究 10 25-34
- 古市久子 1996 幼児の身体表現における「豊かさ」の概念について 保育学研究 34(2) 24-32
- 古市久子 1997 ビデオ観察研究におけるデータ抽出時の問題点について 大阪教育大学紀要(第IV部門教育科学) 45(2) 263-277
- 古市久子 1998 保育者養成のためのテキスト 身体表現 北大路書房

第8章 未来型のこどもの運動表現能力と促進法

- 古市久子 1999 幼児におけるダンス模倣の発達の研究 京都体育学研究 14 1-8
- 古市久子 2007 身体表現の発達に関する研究の現状と課題 児童心理学の進歩, 46
171-195.
- 稲垣佳世子・波多野宜余夫 2005 子どもの概念発達と変化 素朴生物学をめぐって 共立出版
- 森下はるみ 2003 <静>と<動>からみた「子どもの動作」 子どもと発育発達 1(3) 165
-169
- 西洋子 本山益子 1998 幼児期の身体表現の特性 I -動きの特性と働きかけによる変化
保育学研究 36(2) 25-37
- 西洋子 野口春子 2005 保育者としての身体的感性を育てる教育 - 授業での身体表現の
体験による“共振”の形成とその段階の変化 保育学研究 43(2) 42-51
- 坂元昂 1985. 幼児の世界をさぐる フレーベル館
- 鈴木裕子・西洋子 本山益子 吉川京子 2003 幼児期における身体表現の特徴と援助の視点
舞踊学 25 23-31
- 高野牧子 2000 動き遊びからイメージを —— 「川をジャンプ」を題材にして 女子体育
43(6) 24-27

謝辞

ご協力いただいた学校法人栄光学園栄光幼稚園（埼玉県三郷市）の皆様にご礼申し上げます。